

イタドリの栽培および優良系統の選抜について

林業試験場 特用林産部 杉本小夜

[はじめに]

イタドリは県内に広く分布し、産品販売所等で広く販売されている主要山菜の一つである。現在消費されているイタドリの殆どは山採りであるが、近年、シカの食害や環境の変化などにより、太く商品価値の高いものの確保が困難になってきており、効率的な栽培化への要望が高まってきている。このような背景のもと、林業試験場では日高川町生活研究グループイタドリ部会の協力を得て、遊休地を用いた実証栽培試験を行っている。また、今後より効率的な栽培を目指すには、収量が多く加工し易いなど栽培に適した株を用いることが重要であることから優良系統を選抜中である。今回は、栽培における施肥の効果および優良系統候補株の特性について報告する。

[材料と方法]

(1) 栽培実証試験

無耕耘、元肥を施さない圃場で無施肥の区（無施肥区）と追肥を行う区（追肥区）を、耕耘、元肥を施した圃場で追肥を行う区（元肥・追肥区）を設置し、平成 25 年 6 月に定植後、毎年収穫量を調査した。収穫は 2～3 日おきに行い、根元直径が 1.5 cm 以上、長さ 30 cm 以上の若芽を対象とした。全ての区で植栽株には地下茎苗を用い、マルチ被覆を行った。

(2) 優良系統候補株の特性

平成 26 年 6 月に優良系統候補株として県内 9 地域から採取し、挿し木を行った 32 株について、平成 27 年 5 月に得苗率を調査した。得られた苗については、平成 27 年 6 月 22 日に、場内苗畑の育苗床（W310 cm×D110 cm×H32 cm）へ定植し、平成 27 年 10 月に草丈および茎本数を調査した。

[結果と考察]

(1) 栽培実証試験

各試験区とも植栽 2 年目の平成 27 年から収穫可能となった。平成 27、28 年 2 年間の収穫量合計が最も多かったのは、元肥・施肥区で 9.6 本/株、641g/株。次いで追肥区の 7.1 本/株、422 g/株、無施肥区の 3.7 本/株、215 g/株であった。若芽の根元直径には各区で大きな差はなかった（図 1、2）。無施肥区と比較して追肥区、元肥・追肥区の収穫量はそれぞれ 2 倍、3 倍多く、作付け前の耕耘・元肥は収穫量を大きく伸ばすと考えられた。

(2) 優良系統候補株の特性

挿し木から苗の得られた優良候補株は 17 株であり（図 3）、茎発生本数は 1～5 本、茎の平均根元径は 6.4～18.4 mm であった。発生茎本数、太さの他、若芽発生時期、若芽の茎色、茎の伸び方等にも個体差が見られた（図 5）。全体的には、発生茎本数が多い株は茎が細く、発生茎本数が少ない株は茎が太い傾向がみられた（図 4）。

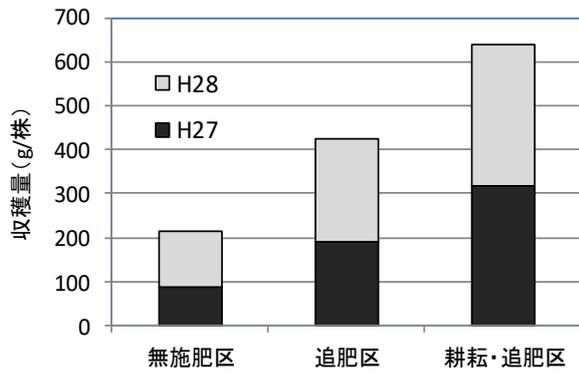


図1 株あたりの若芽収穫量

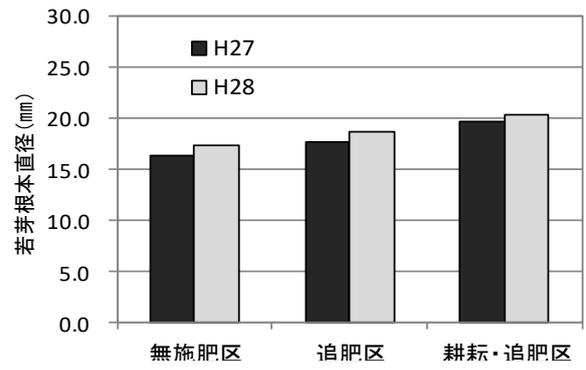


図2 収穫若芽の平均根元直径

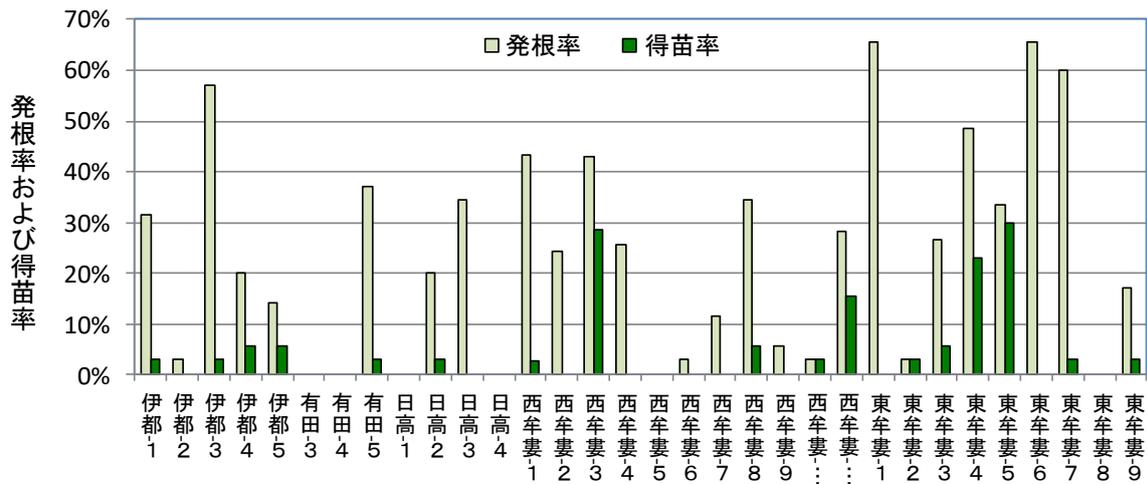


図3 優良系統候補株からの挿し木発根率および得苗率

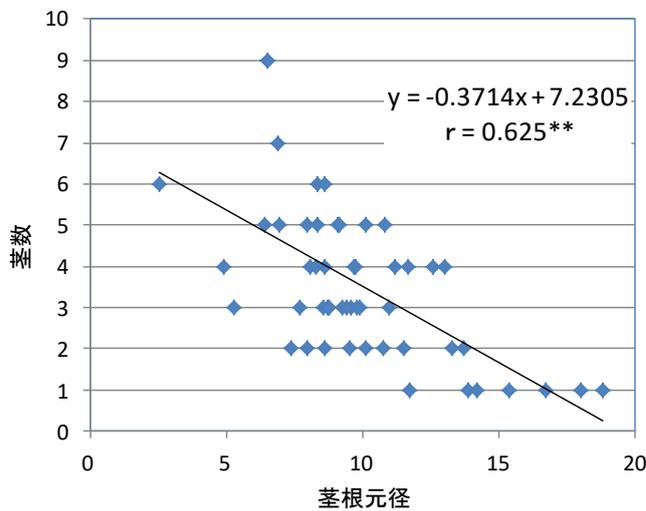


図4 優良系統候補株の発生基本数と茎根元直径の関係



図5 茎の伸び方の違い

(上：茎が細く横に伸びる傾向のある株

下：茎が太く垂直に伸びる傾向のある株)